

2月3日 発題原稿

レッジョ・エミリアの幼児の学校を見ていると、私たちの学校には、本当はヘンなことなのに、それをヘンだとは思わずにすごしていることがとても多いことに気づかされます。つねにそうなので、それを当たり前とってしまうのでしょうか。

日本の学校は外の間人を寄せつけません。地域の住民も、off limit です。学校の塀の中に入るのは、原則として、先生と生徒だけです。もっぱら教える存在である先生と、つねに教えられる存在である生徒だけで構成される社会というのは、相当に歪んだ社会であるといわなければならないでしょう。

もっとも幼稚園や保育園では、ようすはすこし違ってくるのかもしれませんが。子どもの送り迎えで、朝夕、親たちが学校にやってきます。子どもの学校での出来事が話題になって、先生との間で、弾んだ会話が交わされることでしょうか。子どもとつれだって帰る母親たちが、公園で井戸端会議を開いている風景にも、よく出会います。そのようにして、自分たちの日常の出来事を話し合う柔らかなネットワークが形づくられていくのかもしれませんが。レッジョの学校がとても大事にしている親の学校への参加は、それをもう少し発展させたものなのでしょう。

「私はマラグッツイが一更ならずこんなことを口にしてるのを耳にしてきた」と、レッジョのアトリエリスタのヴェア・ヴェッキは記しています。「学校が、どんなに素敵でも、だよ。親との関係やその参加を、自らの哲学的価値の基本にとり込んで実践をすすめていかないと、その教育の価値は、知らぬ間に目減りしていくものなんだよ」と。

ヴェッキは、付言してこうも書いています。

「学校を考える別な見方もあるだろうが、その場合、教育で問題になるのは学校と先生方の専門家としての力量だけ、ということになるわけである。そういう見方をすると、親は愛情を注ぎ、子どもを養育する上では一役を担うが、専門家としてのスキルがないから、学校からは締め出しを食らうことになる。そうは考えず、学校はたしかに重要な学習の場ではあるけれども、けっして唯一の場ではないと考えると、家族もまた文化的な価値を担う主体である、全体としての学校の文化をより豊かにする当事者である、ということになるだろう。」
(Vea Vecchi, Art and creativity in Reggio Emilia.2010)

そんな学校にも、よく見ると、狭義の先生ではない人たちがいます。用務員さんは、多くの子どもたちの人気者です。給食のおじさんやおばさんたち、養護の先生、事務の人たち、それから教育実習生もいます。実習生たちは先生であるように諭されていますし、自分もその気なのですが、子どもから見るとまだ先生ではありません。身近なお兄さん、お姉さんであるからこそ、先生には見えない子どもの素顔が見えるのです。その経験が励みになって先生になりたいと思う実習生が多いのですが、いざ先生になると、なかなかそうはいきませ

んよね。

このような「ちょっと違う」存在が、学校にとっても、子どもたちにとっても大事なのだらうと思います。レッジョの幼児学校にはアトリエリスタと呼ばれる芸術家が配置されていて、とても重要な役割を演じていますし、毎日の食事に腕を振るうコックさんは、convivialité（共生と訳されるが、語源的には一緒に食べる関係性）の演出者として、レッジョの学校の大黒柱になってきました。かならずしも同質ではない多様なスタッフ間の「同僚性」が、レッジョの学校ではとても大事にされているようです。学校がたんなる「学校」であることを超えて、子どもたちの「生活の場」となり「育ちの場」となるための、それは必須の条件でしょう。

それにくわえて、外部のいろいろな人々が、とくに地域の人々が、もっと学校に出入りすることが、やはり必要なのではないのでしょうか。

昔、「ひと」という教育誌の編集に携わっていたころ、「学校に出没するへんなおじさん・おばさんたち」という特集を組んだことがあります。郷土史家をゲストにした授業の記録を中学校の社会科の先生に書いていただいたのですが、それに上司の校長がクレームとつけるというトラブルが前の年であって、腹に据えかねて組んだ特集でした。校長の言では、免許をもたない人間が教壇に立つことは禁じられているのだそうです。そのとき思い浮かべたのが、習志野市秋津小学校の校区の親たちの華麗な活躍で、弟夫妻がそこに住んでいる関係で、いつも話を聞かされていたのです。その特集号に岸裕司さんが書いてくださった「学校を基地にお父さんのまちづくり」は、岸さんの他のエッセイと併せて、その後、本として出版されました（太郎次郎社エディタス）。

習志野市秋津は東京湾を埋め立てて造成された地区で、住民は全国から集まったばらばらな人たちです。まず中層の団地群ができて、少し遅れて戸建て住宅の入居も開始され、新住民の子どもたちのために1980年に秋津小学校が開校されたのです。

父親の多くは東京や千葉に通う3-40代年のサラリーマンで、家には寝に帰るだけでした。女性たちも見ず知らずで、お互いのつながりは希薄でした。そんな住民を相互に結びつけたのが、学校という名の広場でした。「学校を基地にお父さんのまちづくり」という岸さんの書名は、その経緯を一語で要約しています。親たち、とくに企業人間で学校には足が遠いといわれている父親たちが、学校の中に自分の出番を見つけて活動の場を広げ、お互いのつながりをつくりだしていくようすが語られています。たとえば飼育小屋づくり。学校の飼育小屋が野犬に荒らされるという事件があって、PTAはもっと頑丈な小屋をつくることにしたのですが、お父さんたちが名乗り出て、凝りに凝った堅牢な小屋をつくった。父親たちの楽しみは毎回の作業後の酒盛りであったようです。寝転んで本を読める低学年児の図書室をつくりたいという学校側の要望に応じて、便利屋さんの父さんたちはまたまた大活躍、母親たちはそこで「おはなし会」や「読み聞かせの会」を開いて、「ごろごろとしょしつ」は子どもたちのお気に入りの場所になっていきます。夏は校庭での一泊キャンプ、秋には子ど

も祭りのパレード、92年には大人と子ども総勢432人出演の盛大な秋津オペレッタが上演され、さらには「蚊帳の海」と称するギンギンにアヴァンギャルドな地域劇団が生まれ出てきます。昨年の夏、学校に立ち寄ったら、校庭の一角はビオトープになっていて、水路が張られ、田んぼの稲が穂を結び、秋には親子餅つき大会が開催されるのだそうです。埋立地のはずなのに、上総掘りという伝統的な工法で井戸が掘られ、子どもたちはドラム缶風呂を楽しんでいます。先生たちもヒマがあれば参加するようですが、それらは基本的には親たちの、もしくは地域の人々の仕業で、学校の空き教室は工作クラブのおじさんたちのアトリエになっています。地域には何十ものグループがあり、さまざまな世代の住民たちがさまざまな活動を繰り広げているようです。親たちの学校参加は、たんなる学校への協力にとどまらず、地域のさまざまな世代間の関係性をつくる運動であり、岸さんの言葉を使えば *daily democracy* を生み出す運動でもあったわけです。

レッジョに何校かの市立幼児学校が開校され、それを承けて市民組織「学校と都市・委員会」が組織された1970年代の初頭は、ユネスコが「生涯学習」というコンセプトを提唱し、またイヴァン・イリッチの *deschooling Society* が刊行されて、広く読まれた時代でもありました。*deschooling society* は「学校のない社会」などと訳されることもありますが（フランス語訳では *une société sans école* となっている）、そうではありません。社会そのものが学校になってしまっている、と、イリッチは言っているのです。学校化された社会とは、文化が自分たちの創造するものではなく、与えられるもの、すでに生産されたものの受動的な消費になってしまう社会、ということです。それは人間の希望を商品への期待にとって代え、個人の関心を私的な、消費者としての関心の中に封じ込めます。そういう社会から抜け出そうではないか、と、イリッチは言っているのです。

おそらくマラグツツイにとっても、学校を古い鑄型から解放することは、社会そのものを非学校化することと一体のこととしてあった、と、いってよいのではないのでしょうか。60年代を通じてレッジョの人口構成は大きく変化しました。新住民を多くふくんだレッジョの親たちは、学校への関わりを通して、コンヴィヴィアルな共同性を形づくり、そこに *daily democracy* を根づかせていったのです。レッジョのもっとも価値ある面目は、そこにあると私は思います。

私はこのところ、1920年代の新教育運動に興味をひかれています。第一次世界大戦という破局的な経験がバネになって、欧米ではこの時代、硬直した国家主義教育を問い直す動きがとて活発になりました。戦争の被害が相対的に軽微であった日本でも、その影響を受けてか、子どもを中心に置いた活動主義的な教育を模索する多様な動きが生まれてきます。そのような学校の多くは大都市近郊の新興住宅地につくられたもので、親たちは一方ではわが子に自由な教育を受けさせたいと思いつつも、他方で進学が心配でもあり、だから退学者を多く出さないために学校側も妥協して、当初の方針を少しずつ変えていくことになります。そのあたりの事情はヨーロッパでも同じで、セレストン・フレネも同時代の青年教

師として、そのことを鋭く分析しています。

よい商品を提供してお客さんの期待に応えるという図式の中で学校をつくっても、その商品の質は、しばしば資本と市場の論理に押し流されていくことになります。おそらくマラグツツイは、ジェルピの生涯教育論やイリッチの deschooling society 論を横目で見ながら、市民社会と学校のあるべきダイナミックな関係に思いを凝らしていたのではないか。当時の彼の文章を読んでいると、そのように思えてなりません。